

三康文化研究所

研究員

オススメ本コーナー

「観無量寿経」

『観無量寿経』という經典は、冒頭に手塚治虫の『ブッダ』にも描かれた「王舎城の悲劇」を説き我が子アジャセによって幽閉されたイダイケ夫人を中心にして、お釈迦様が阿弥陀様の極楽世界の様子と、そこへ往生する方法を詳しく解説した内容です。分量的にはそれほど大部ではありませんが、今なお全世界の阿弥陀仏信仰を支えている実に重要な經典です。特に中国唐代初期に活躍した善導大師の『観經疏』という『観經』の注釈書は、浄土宗を開いた法然上人をはじめ日本の阿弥陀仏信仰にも大きな影響を与えました。

この『観無量寿経』には多くの解説や現代語訳が出版されています。たとえば佐藤春夫訳注『観無量寿経』、坪井俊映『浄土三部経概説』、岩波文庫本『浄土三部経』、高松信英訳、大角修訳、浄土真宗教学研究浄土真宗聖典編纂委員会『浄土三部経（現代語訳）』、『大乗仏典』6（中公文庫）

第10回 研究員のオススメ本紹介コーナー

＜『観無量寿経』について＞

今回ご紹介いただいた三康文化研究所研究員はこちら！



柴田 泰山 (しばた たいせん)

専門分野：中国仏教、浄土宗学

2023年第10回三康文化研究所「観經」(『観無量寿経』の略称)に関する書評の投稿、応募して「観無量寿経」についてのオススメ本をご紹介いただきました。中国仏教や浄土宗学は佛典研究に對する理解と深い知識を要するとしていますが、代表的な大乗經典である「観無量寿経」を選んでみました。

「観無量寿経」を知りたい！

『観無量寿経』かんわりょうじゅきょう
『観經』と略称がある。原典的な資料は確認されていない。漢訳經典とウイグル語訳(漢訳經典からの翻訳)が現存する。原典は中興学が定めており、漢訳時に多分に中国の要素を追加しつつ經典を翻經したとする折中説が有力視されている。漢訳は西域出身の三蔵法師である(『きょうりょうやしゃ』(382-443)が訳出した)。

専門文献：Web版 浄土宗大辞典

「観無量寿経」

『観無量寿経』という經典は、冒頭に手塚治虫の『ブッダ』にも描かれた「王舎城の悲劇」を説き、我が子アジャセによって幽閉されたイダイケ夫人を中心にして、お釈迦様が阿弥陀様の極楽世界の様子と、そこへ往生する方法を詳しく解説した内容です。分量的にはそれほど大部ではありませんが、今なお全世界の阿弥陀仏信仰を支えている実に重要な經典です。特に中国唐代初期に活躍した善導大師の『観経疏』という『観経』の注釈書は、浄土宗を開いた法然上人をはじめ日本の阿弥陀仏信仰にも大きな影響を与えました。

この『観無量寿経』には多くの解説や現代語訳が出版されています。たとえば佐藤春夫訳注『観無量寿経』、坪井俊映『浄土三部経概説』、岩波文庫本『浄土三部経』、高松信英訳、大角修訳、浄土真宗教学研究所浄土真宗聖典編纂委員会『浄土三部経（現代語訳）』、『大乘仏典』6（中公文庫）『浄土三部経』、正木晃『現代日本語訳浄土三部経』、そして筆者も翻訳に参画した浄土宗総合研究所『現代語訳・浄土三部経』などなど、多数あります。

また『観経』には、月光と耆婆という人物が、アジャセに対して、「偉大なる王よ。私どもがバラモンたちの言い伝えについて聞き及んでいるところでは、この世界が誕生して以来、これまで悪しき王〔と称された者〕は大勢おりまして、国王の位を欲して〔王である〕父を殺害した例は数多ございます。〔しかしながら〕いまだかつて極悪非道にも母親を殺めたという話は聞いたことがございません」と進言する場面があります。実は、經典では父殺しの数を「一万八千」と記載しています。父殺しの数が一万八千とは尋常な数ではありません。実は当のアジャセも我が子の手にかかり、そしてアジャセから四代後のナーガダーサカ王も実父を手にかけて王位を得ていたのです。そしてナーガダーサカ王が王位に就いた後に、「この家系は五代に渡って父殺しの家系だから王位に相応しくない」という意見によって、当時の大臣であったシシュナーガが王位についたという伝承があります。つまりアジャセからナーガダーサカ王までの五代に渡って、父殺しが続いていたのです。このように考えると、月光と耆婆の「これまで悪しき王〔と称された者〕は大勢おりまして、国王の位を欲して〔王である〕父を殺害した例は数多ございます。」とは、アジャセ本人を指示するのみならず、まだ見ぬアジャセの将来をも予見した言葉だったといえるでしょう。

このようなことは『観経』が成立した背景に関する研究を通じて知ることができます。たとえば末木文美士『観無量寿経』（『浄土仏教の思想』第2巻や、藤田宏達『浄土三部経の研究』などには、『観経』の翻訳問題、成立背景、内容などについて詳細に研究が行われています。

また『観経』の書誌的なことについては国際佛教学大学院大學学術フロンティア実行委員会『日本古寫經善本叢刊』第三輯に、多数の写本類の整理が行われています。特に『観経』は各種写本や版本を比較すると、文字の異同が多い經典でもあります。この文字の異同は、中国仏教や日本仏教が『観経』を受容する過程のなかで発生したものです。換言すれば中国仏教や日本仏教において、經典受持者の信仰と実践と解釈のもとで經典を改変していくことも可能であり、しかもこの改変は個々の信仰者や実践者や解釈者の位相において行われつつも、その根拠は常に經典自身の内部構造にあり、經典と經典受持者との間において取り交わされた対話と実践に基づく改変であったものと考えられます。

このような大乘經典自体が有する複雑な歴史性こそが、多数ある写本類や版本類の文字の異同の一因であるとともに、この大乘經典の歴史性が常に大乘の歴史の背後に存在しています。個々の大乘經典の有する歴史性が大乘における經典受持と經典書写と經典伝持の過程であり、個々の大乘經典そのものが大乘の根拠と根源であり、中国仏教や日本仏教は大乘經典に対する信仰と実践と解釈を基盤として成立しています。その意味でも、『観経』は代表的な大乘經典であるといえるでしょう。

（柴田 泰山）